

日本昔話より みやこ鏡

〈初演〉

殿様

「孝行者の太郎作とやら、その孝行やあっぱれなり、褒美をとらすぞ、
金か、田畠か、何でも望みを言うてみよ」

太郎作

「何にも要らねえでござります」

殿様

「本当に何もないのか」

太郎作

「望みがあるといやあ、たつたひとつ、死んだお父つさまに一日会わせてもら
いてえ。でもそれは無理なことでござります」

殿様

「ふうん、ああこれ、都にて求めし家の宝のアレを持て。：太郎作よ、
この箱の中を覗いてみよ」

太郎作

「こりや、お父つさまか、ちよつと若返ったかなあ、泣かないでおくれよ、
おれも泣くよ、お父つさまよ」

「その品、孝行なるそのほうにつかわす、ただし人には決して見せるで
ないぞ、よいな」

むかしむかし、山中に小さな村があつたとさ

村一番の親孝行の太郎作が、褒美にもらつた大事の箱、言われたとおりに
誰にも見せずに納屋の奥、古いつづらにしまつたが、

朝な夕なに寝る前に、

太郎作

「お父つさま、おはようございます、今朝は冷えるが寒くはないですか」

太郎作

「お父つさま、ただいま帰りました、麦もだいぶん膨らんで来ましたよ」

父つさま 父さま、顔を見ずにはいられない

女房

「あんた、どこへ行くのかい」

太郎作

「あ、うん、はばかりへ」

『風よ吹きやるな 吹いても言うな

願い叶うた 納屋の中

「おや、また、はばかりと嘘ついて納屋へ入つて行つた」

『エー、うちの亭主は正直者よ

それが慣れない風吹かす

たてもたまらず女房は、亭主の留守に納屋に入る。

隅から隅まで調べると、

つづらの中に見慣れぬ箱。覗いてみれば、こつちを見ている女の顔に、
女房びっくり、

女房

「やい、おまえはどこのどいつだ、返事しないか、図々しい、なんだよ、ぼさぼさ髪の、色黒の、へちゃむくれがさ、なんだよ、泣いてやがる、泣きたいのはこっちの方だよ」

知らずに戻った太郎作を、逃さじ遣らじと詰め寄る女房

（女） あんた、何かわたしに話はないかえ

（太） なんにもないよ

（女） 隠し事は

（太） なんにもない

（女） あの女子はさ

（太） どの女子だよ

（女） つづらの中の

（太） 見たのか！

（女） ほら、やつぱり女子を隠してた

（太） ありや死んだ父つさまだよ

（女） ええ悔しい、あんなぼさぼさ髪の、色黒の、へちゃむくれは、どこの女子だ

（太） 父つさまだよ

（女） わたしに隠して　えい　えい　えい

とつくみあいの大喧嘩。

そこへ通つた尼さんが、まあこれこれと仲割つて、わしが見てきて
やりましょと、
納屋の中にぞ、進める。

辺りは人の気配なし。古いつづらのまたその中に、ありがたそうな
箱ありて。左右見回し、おし開けば、

「やあ？」と尼は思案顔。うん？うん！うんうんうん：
「中にいたのはな、女子じや、けどもな、すまながつて、髪切つて、
尼になつていたわ」

とさあ、鏡を知らない村の中

今日はこれまで、おしまいおしまい。

尼さん